

奈良高専 図書館だより

No. 5

記事

1. 読書感想文コンクール
2. 入選作品(8編)
3. 新着図書案内
4. JOISについて

1980年2月 奈良工業高等専門学校 発行

昭和54年度

読書感想文コンクールを終えて

図書館委員会図書部会
国語科

恒例の行事となった、夏休み課題の読書感想文コンクールは、今回で4回を数える。提出された作品について、学校図書館委員会の先生方と国語科の教官とが慎重に審査した結果、次に掲げる8編を優秀作品として選び出した。各学年より2編ずつ、ただし、4・5学年は一括して2編、の合計8編である。応募状況や佳作などについての詳細は、国語科の『読書感想文集』に譲ることとして、ここでは、入選作の8編について概評を試みることにする。

今回選ばれた作品をみていると、そのいくつかに通ずる特徴があることに気づく。自我の確立や、真の人生を求めて模索する書き手の姿である。例えば、『死と生の記録』で大隅君は、「よりよく生きる」という問題意識をもって読み進み、「生かされる」とか「愛」などという、崇高な生き方に目を開かされている。『九月の空』の長井君は、同年輩の主人公・勇と自分の生き方とを比較して、自己を客観的に見る目を身につけようと考え始めている。『二十歳の原点』で小川君は、悩み傷つく作者の姿に自分を重ね合わせ、強い共感を覚えている。『されどわれらが日々』にも、青春の日々を真剣に生きようとして苦悩する群像が登場して来る。この本を採りあげた市川君(昨年度も入選)もまた、生きる確かな手ごたえとあかしを求めて模索しているのだ。青春とか人生とかいう、いわば永遠のテーマにとり組んだこれらの感想文が秀作として、選ばれたのは、故なしとしないのであって、青年らしい

純真で真剣な求道の態度が、審査の先生方に好感をもって迎えられたからであろう。

『車輪の下』の川井さんも、昨年に続いての入選で、丹念で的確な読みが評価できよう。「父親も車輪の犠牲者だ」というとき、現代の教育問題までも俯瞰し批判し得る高所に立っている。田中君は、『阿Q正伝』をよく消化し核心をとらえ得た。阿Qを肯定しかねない自分の弱さを批判して、この感想文にいつその奥行きをもたせている。『あゝ野麦峠』の杉原君、素直でまとめ方にそつがない。映画も見て書いた強みで、文が生き生きしている。高まる感動を押えた表現もあってすぐれている。佐竹君、『海辺の光景』という本格派の文芸作品にとりくんだ意欲をかいた。常識に装われて眠っている「異常感覚」の不気味さ。しかも、それが人生の真実かも知れないという主題によく迫って、整然と表現し得ている。

以上の作品のほか、佳作の諸君の名前を次に掲げておく。

○1MA 植西権蔵、後藤浩司 ○1E 鶴飼浩二、後藤雅晴 ○1C 井上扶美 ○2MA 窪井康友、○2MB 山村敏彦 ○2E 長浜浩二、野村 勝、和田徳洋 ○2C 池田真史 ○3MA 垣野光弘、山中直樹 ○3MB 天野裕司 ○3E 足田浩一、○3C 岡崎泰子、阪本佳史、佐保田圭吾 ○4MB 松好 卓 ○4E 安堂雅俊 ○4C 藤岡徳之、増田博司

「死と生の記録」

I M A 大隅慶明

生物体、いや人間は常に、生きているのではなく生かされているのである。しかし、今の人間の多くは、それに気付いていず、ただのんびんだらりと日々を暮らしているのではなからうか。そして「生きる」という事に対して何の疑問も持っていないのではないだろうか、などという事をまず最初に痛感した。生かされているという言葉の裏には多種多様の意味があり、本書ではそうした「いかに生きるべきか。」ということ、多くの事例をあげて訴えたかったのではなからうかと思う。そしてその中から真実の生き方というものを見いだしてはしなかったのではなからうか。

自分としても、「ああ、生きてるんだな。」と思う事は時々あるが、やはり、「生かされている。」と思った事は過去にはないと思う。そして、真実の生き方なんてことはただの一度も考えたことがなかった。しかし、本書の中のいくつかの実例を読んでみて、生と死、それに愛というものについて考えざるをえなくなってしまった。そのひとつとして今まで僕の持っていた「死観」というものがあつた。例えば死刑で言うならば、今まで、死刑とは残酷で最も人間らしくない醜い死に方だと考えていた。しかし果たしてそうであつたらうか。

本書には、死刑になった人々の心理、感情などがいくつつか掲げられているが、そのうちの一人である尾崎秀実さんは、ソ連のスパイの共謀者として死刑を言い渡された。その時に獄中から、家族に送った手紙というものは、僕の想像とは全くちがっていた。それはどうということかと言うと、醜い死に方であるとか、自分が恥ずかしいとか、悲観めいたことは、ただのひとつとも書かれておらず、自分が受けた立場を、「僕は、このごろますます、僕の受けた異常な環境を貴いものと感じてきた。」とまでも書いている。これはどういふことであろう。どんな根拠があつてこんなことが考えられるのであろうか。人間だれでも、死刑を宣告されて、その死刑の一カ月前に、自分の立場を貴いものだと考えられるのであろうか。そしてその次にこうも書かれている。「その絶体絶命の境地と面と向かって立たされているということは、なんと大きな公案を与えられたことだろう。」僕はこの人の心の大きさ、精神の強さにただ驚くばかりであつた。

しかし、もう少し深く考えてみた。ただ、心の大きさや精神の強さだけで、こんなことが言えるのであろうか。いやそれだけではないと思う。人間が死の瀬戸際まで追いやられた時に、人間は始めて、「ああ、生か

されているんだな。」と感じるのではなからうか。そしてこの尾崎さんも、死刑を目の前にして初めて「生かされている。」ということを感じ悟った末、自分の立場というものは貴いものであると考えたのではなからうか。僕も、生まれて始めて、「生かされている。」ということを考えて。そしてまた、人間のほんとうの死の迎え方というものは、こういうものであつてこそ、今まで人生を生き抜いてきた価値があるのではなからうかと思つた。

それでは、真実の生き方とはどんなことなのだろう。僕は本書の中の、「なぜ生きているか」を問いつけて、(加藤諦三)という話を読んだ時に、それに近いようなことを感じた。それは、加藤さんが、人間は何のために生きているのかということ、本を読んだり、自分で考えたりして、必死で考えて、そして考えて考え抜いた末、「人生とは何だと考えるよりもまず生きることだ。」という平凡なことに気付くのである。わざわざ回り道をして、この平凡な答えを得た加藤さんは、その回り道をしたことにより、真実の生き方を見つけ出したのだと思う。僕は、いかに生きるかと言うことは、根本的に生きるということがわからないとつかめないのではないかと思つた。

それからもう一つ、「コルベ神父の身がわりの死」という話を読んだ時、これこそ、ほんとうの愛であり、真実の生き方であると感動してしまつた。その話とは、ナチスの強制収容所で、一人の男が消えた罰として、同獄者の十名が、餓死監房に送られることになつた。が、その中の一人が、「家内と子供にもう一度会いたい。」と叫んだ。その身代わりにコルベ神父は挺身して死の獄に赴いた、という話である。そして死んだ後の神父は、壁によりかかり、目を大きく見開き晴れやかな神々しい顔をして一点を見つめていたそうである。僕はこのような人、コルベ神父のような人こそ真実の生き方をし、自信をもって死んだ立派な人だと思つた。そしてまた、こういうことが、ほんとうの愛、真実の愛であると思つた。

死と生と愛、これは人生論の中心である。ぼくは、本書からこの人生論を深く感じたことによって、自分が少し今までより深く考えられるようになったと思つている。

「九月の空」

I M B 長井孝之

「九月の空」を読み終えて、僕は何かすがすがしい気持ちになつた。主人公である勇は、僕と同じ高校一年であるが、ずいぶんと毎日の生活に問題意識を持っており、のんびんだらりとした生活をしている僕を、

はっとさせた。

勇が、クラブの合宿を休んでまでも旅に出たのは、このまま外に出ることなく、高校の体育館の中でずっと過ごしている、永久に、ほかの人間たちと話す機会をもてなくなるのではないかと考えたからだ。

僕も、ときたま、ふとそのような事を考える。他校に通う僕の友達と話して別れた後などに、なぜか、自分だけが孤立しているように思えてくることがある。なぜか自分だけが、特殊な環境下におかれているような錯覚をおこして、孤独を感じてしまうのだ。しかし僕は、今まで一人で旅に出ようとまで考えたこともないし、そんな勇氣はない。ところが、勇の場合は一人で旅に出た。このへんに僕と勇の違いがあるのだと思う。勇はただ単に、実行力があるから旅に出られたのではない。本当に自分の生活を見つめているからだ。とすると、この僕を感じる孤独感は、文章中に出てくる「甘えた心から出た孤独感」なのだろうか。

具体的に小説中に描かれているのは、ほんの数日間であり、大別すると、旅先のできごとと、主にクラブ活動とおとしての学校生活に分かれるが、その両方で勇は、とても張りがある、生き生きとしている。特にクラブをやっている時の彼は、一段と人間らしく見える。防具をつけた勇からは、なにか、情熱といったようなものが感じられるし、相手と向かい合ったとき、他の一切を忘れ、戦いに没頭できる彼はすばらしいと思う。

僕が一番熱中している時といえば、好きな音楽を聞いているときだが、情熱といったものはない。クラブにもそれほど燃えていない。クラブをするのはなぜかなど考えない。ただ毎日のことだからやっているのだろう。そんな自分に問題を感じないのは、やはり、自分を見つめる眼がないからで、そこが勇との違いだ。勇は、僕と同年でありながら、僕より数倍大人だと思った。なぜか勇はすばらしい青春を送っているのだと感じ、自分の青春はつまらないような気がした。勇は成績はよくないほうだが、そんな事に関係なく、勇のような青春にあこがれを感じた。

この小説を読んで、すがすがしい気持ちになれたのは、小林勇という、まったく素直な性格を持ち、僕から見れば新鮮な生き方をしている青年に会えたからだ。

「阿Q正伝」

2 M B 田中良昭

「阿Qとは、なんとうらやましい奴なんだ……。」
——途中まで読んで、僕はこんな感想を持ちました。その理由は、彼は自分自身の敗北というものを、ほとんど感じなくてもよいからです。彼は、決して自分を

他人よりも「子供」としません。万事を、自分に都合よいように考えて満足できるのです。彼は実にうらやましい奴です。

ここでちらっと、本のカバーの売り文句を見てみましょう。そこには、「民族のマイナス面として典型化された『阿Q』を通じて、『辛亥革命』の内臓を痛烈にあばき、その失敗を教訓として民族的決意を促す主題を貫く。」と書いてあります。これは、僕にとって大へん意外なことでした。この文を念頭に置いて最後まで読みました。

こうなると、辛亥革命についての知識なしでは、最初に述べたような感想で終わってしまいます。この小説は、芥川龍之介や三島由紀夫のような文学とは違うから、知識はどうしても必要です。

清朝が、列強に対して屈従的態度をとったために、民衆の生活は圧迫された。辛亥革命は、その民衆の生活改善を願って起こされた革命だったようです。したがって、人民の政治的思想は浅薄で、ただ反清だけを目標とし、反帝・反封建は顧みられなかったのが実際に、人民は皆、自己中心だったのです。したがって、革命は簡単に成功しましたが、成功した一つ一つの省にはっきりした主張もなく、結局、清朝側の官僚に政権を奪取され、革命は簡単に失敗しました。

ここまで来て僕はやっと、「阿Q正伝」が、頭の中で平面から立体へと構築され、一つ一つのフレーズが、浮き彫りにされていくのが分かりました。

僕は、未荘の人たちの行動を、初めは「変だな。」と思っていました。が、それは決して変ではなく、革命が行われた頃の人民そのものだと思ったのです。彼らには、主張や思想は薄く、未荘で最も勢力のある趙大胆を尊敬し、恐れ、そして彼に関係がある者に対してなら、たとえそれが「阿Q」であっても尊敬するのです。また彼らは、自分たちよりも物質的に豊富であるというだけで、尊敬の念を持ちます。見事に自己というものが、欠けているといえます。自己の確立していない人々に団結などありうるでしょうか。

挙人旦那と自警団の首領とのやりとりも、その典型といえます。どちらも、自分の損失と面子のみに固執して、譲り合わないのです。

「阿Q」—彼は、もちろん、民族のマイナス面の典型でしょう。それが最もよく表れているのは、彼の革命へ賛同した動機だと思います。彼は、彼の軽蔑する人間を殺すために、また、他人から彼の欲する物を略奪し、自分の生活を豊かにするために革命へ賛同したのです。そこには、革命後の世の中や、人々の幸せの事など、彼の頭には、一かけらもないのです。

「阿Q」の姿は、辛亥革命失敗の原因を表しており、未荘の人々や挙人旦那、自警団の首領たちの言動は、民族的団結と決意がいかに重要であることを示していると思います。そして、ここに作者の意図は十分に表現

されています。よく、このような喜劇的タッチの中に、これだけの内容が納められたものだと感心しました。

最後に気付いたことがあります。僕は、冒頭で「阿Qはうらやましい。」と書きました。もし、途中でカバーを見なかったら、最後までそういう感想だったでしょう。ここに、何かこわいものがあります。つまり僕には、「民族のマイナス面の典型」を肯定する心があるのです。おそらく他の人もそうでしょう。この小説は、そうした僕たちに、過去・現在・未来を通じて、警鐘を鳴らし続けているのではないのでしょうか。

「車輪の下」

2 C 川井利恵子

この作品には、風景の美しさがよく表現されている。このことから、作者は詩人であることがわかる。少年の複雑な心理を、恐ろしいまでに写しだせるのも、作者のこの点にあるのだろう。が、それよりも、この少年の心理は、かつての作者自身のものなのである。

ここでいう車輪とは、少年の心理に理解を持たず、傷つきやすい少年の心を踏みにじて行く教育のことである。その教育を重んじる人が多すぎた。そのことが、ハンスを理解してくれた唯一の人フライクおじさんの忠告をも、少年の脳裏からかき消してしまい、「車輪」は大きくなって、ついには、交友によって得られた幸せさえも太刀打ちできない程になり、少年の上に重くのしかかったのである。

ハイルナーの出現は、ハンスを結果的に地獄へつき落とすきっかけとなった。しかし、果たしてそうだろうか。ハンスは、ハイルナーによって、今まで大人達により抑圧されていた、大切な自分の考えや言葉・自由に目覚めたのではないだろうか。もし、ハイルナーに会わなければ、ハンスは今頃、大人達のいうりっぱな牧師となっていたことだろう。しかし、それでは人間的にかたわなのだ。なぜなら、彼は少年期に必要な自由をもたなかったから。それさえ気づかず、自分こそが栄誉ある牧師だと思って生きるハンスよりも、自分の考えや言葉をもつことができるようになったこのハンスを、私は、幸せなのだと呼びたい気持ちだ。

そのことを理解できぬ人々によってハンスは、その幸せを苦痛にかえられてしまった。ハンスは、ハイルナーのように強くはなかった。というより、ハンス自身、その幸せに気づいていなかったのかもしれない。いや、彼は神学校を離れても、なお教育という大きな車輪の下じきとなっていたのだろう。彼が、その車輪から、死によって抜け出せたということ、それはあまりにも悲しいことだ。

ハンスは、恋をしり、また深く傷つきながら、働く

ことの喜びをしり、成長するために懸命になった。死を決意したことも忘れて……。しかし、今まで車輪の下で生きてきた少年にとって、それはどれほど苦しいことだったろう。たぶん、その苦しみは、作者にしかわからないだろう。

彼は、その苦しさに堪えかねて自ら死を選んだのだろうか、単に、事故なのだろうか。それは、私にはわからない。この少年の死のあけなさが、彼が苦しんだ長い道のりとは対照的で印象に残った。

途中、ハンスは、「ああ、われはいたく疲れたり、ああ、われはいたく弱りたり。財布に一銭だになく、懐中無銭なり。」と口ずさむが、このへば歌にこそ、息子の傷つききった心がにじみでているというのに、父親は、この重大な意味を理解できず、精神薄弱の印だときめてしまう。もし、この時父親が、彼の理解者となりえたら、彼の死はくいとめられたかもしれない。自殺でないにしろ、彼は父親という理解者により、自分に自信をもち、日曜日にも自分をかくすような態度をとらなかっただろう。

しかし、この哀れな父親を責めることは、人間にエリート意識がある限り、できないだろう。

息子を重い車輪の下じきしていることに気づかず、息子の心も理解できなくなってしまい、最愛の一人息子を失って初めて、息子にのしかかっていた車輪の重さを知った父親もまた、少年の心を踏みにじていく教育という車輪の犠牲者なのである。

彼は、車輪に、一人息子というあまりにも大きな代償を払い、その罪を背負って生きていかねばならない。

彼の姿は、現代の人々に教育というものを考えさせることだろう。

「海辺の光景」

3 M B 佐竹 彰

僕にとって、安岡章太郎の小説を読むのは初めてである。この作品の他、同時に「愛玩」も読んでみたが、この作品は、「愛玩」の虚無と滑稽さとは違った、暗さと不安に満ちたもののように思われた。

主人公は、海辺の病院で母を九日間見舞うのだが、彼の心には、僕らの心が日常生活で頼っているところの、感情の統一性というものが欠けている。彼は、母に対する看護人の不親切（少なくとも彼にはそう見える）にいらだちを感じるかと思うと、また自分の母親に不快感を抱くこともある。いや、なにより彼自身が、自分の行動や心情に対して、疑問と不安といらだちを感じているのである。それは、自己に対する批判といったようなものではなく、得体のしれぬ不安、漠然とした不快感なのである。

彼の不安には、その原因になるものも、対象になるものもないし、場合によっては、不安の自覚すらない。暗鬱な気分として、それが感じられるのみである。それは、現実世界に対する、恐怖と不安と怒りなのかもしれない。それが対象と形をあたえられて、一つの不安を作り出すだけなのかもしれない。

現実世界は、常識でささえられている。そして、常識を造り出すのは常識的感覚だ。そして、我々はこの常識的感覚を、全くの普遍的感覚としてとらえている。そして、それにそわない人間の感覚を、それが、持続的であれば「精神異常」と呼び、一時的であれば「魔がさした。」とかという言葉でごまかすのである。しかし、それは本当に異常であったり、一瞬の気の迷いであったりするのだろうか。それはいつも我々の中にあり、しかも目覚めていないだけなのではなかろうか。

我々は小さいころから、この常識的感覚の中で生き、またこれを身につけるよう教えられてきた。親しいものの死を「悲しい。」と感じ、家族を「親しく、愛すべきもの」として教えられてきた。しかしこの主人公の彼は、義姉を失って、涙にくれる伯母に向かってこう叫ぶのだ。

「なぜ泣くのか、泣けばあなたは優しい心根の、あたたかい人間になることができるのか！」

そして、彼はこの言葉を、皮肉や伯母に対する恨みなしに、本心から伯母に問うているのである。

この作品は、精神病院を舞台に描かれているが、主人公の彼の目には、正常であるはずの父や医師や看護人等が、猜疑と不安の対象として見えるのに対し、異常であるはずの精神異常者達は、それほど不安の対象とはなっていない。意識不明の老妻が、病床で夫を呼び、夫が微笑でそれに答える感動の場面でさえ、彼は「不思議な出来事」と見、夫の微笑を「いつものうす笑い」と見るのである。

僕自身、このような感覚を時として持っていることがある。そして、それを自分で非常に恐ろしく感じる。僕には、この感覚は、人の心の中にある、開けてはならない「パンドラの箱」のようにも思えるのである。

「あゝ野麦峠」

3 E 杉原正人

読み終えた後で、映画を見に行ってきた。見ていてつらくなるのではないかとの懸念を抱いて……。さすがに涙を誘われはしたが、工女たちの仕事ぶりも活気があるので、見ていて息苦しくなったりはせず、明るく美しい女性映画だと思った。

明治末の話ゆえ、粗悪な食事、長時間労働、低賃金がおきまりの「女工哀史」の時代である。彼女らが生

まれた飛驒の村々は、当時収穫の望みの薄い土地柄で、貧農の娘たちは、幼い顔をした十二・三歳で、新工として岡谷を中心とする生糸工場へ売られ、親のもとを離れてゆく。行く手に何が待ちうけているかも知らず、希望に胸ふくらませて元気に旅立った。飛驒高山から信州岡谷へ、吹雪の中、四十里の道のりを全身雪に染めた小さな命が歩き続ける。現代のキャリア・ガールの観光地は少女たちにとって三途の川であり、ここに血と汗と涙を流したわけだ。峠を越えても地獄、とどまることもまた地獄であった。彼女たちは泣いていない。いや、流す涙も凍りつくのだろうか……。

工場に着くやすぐ仕事。外は未明の寒さが肌をさすというのに、繰釜の中は百八十度の熱湯がたぎり、室内温度は八十度を越して、ムツとする蛹の悪臭が鼻をつく。水蒸気が天井にあがって冷え、大粒の水滴となって雨のように落ちてくる作業場では、工女たちの着ている着物はみんな濡れていた。三十五度ともなると、耐えきれずクーラを働かせる今の我々には、想像の及ばぬ作業風景である。

労働基準法の改正が先ごろ問題となり、たとえば、女性の生理休暇を認めないとの方向が、特に女性側から強い反発を受けたが、ここでは生理休暇はおろか生理的要求である小便すらままならぬ過酷な労働を強いられていた。彼女らの宿舎には錠がかけられ、火事になってもすぐには開かれず、監視役に検番がおかれ、娼家に売り飛ばされたも同様な生活である。苦しさに耐えきれず身を投げる者や病に苦しむ者も多かったが、彼女たちは、一年死にもの狂いで稼いだ金を持ち、正月に両親の喜ぶ顔をみることだけを楽しみに耐えたのであろう。そうした彼女らにとって、工場での唯一の楽しみは、貧農の我が家では口にできない米の食事であった。

時には、会社側に悪条件の改正を申し入れストライキをしたが、これは申し入れというより、戦争への反発であったように思える。戦争すべてが、この糸とり工女はもちろん、あらゆる国々、あらゆる人々に何らかのかたちで影響を及ぼし、戦後三十四年が経過した今日にもその影はうかがえる。

昭和四十年の調査によると、「糸ひきに行ってよかった、ありがたい。」と答える人が多いことには驚いた。その時は、たいへん苦勞してつらくいやな思いをしたろうが、あとになって振り返ると、その時代の、生きてきた自分の跡を見いだして懐かしいのであろう。これは悲しすぎるけど、光り輝く青春である。喜びも悲しみも青春のすべてを賭けて、名もない少女たちのたどった日本の「絹の道」、そこを少女たちは、何を求めて歩いたのだろうか。小さなしあわせだったのであろうか。

「されどわれらが日々」

4 M B 市川浩一

果てしなく広がる夢を追い、大きな野心に燃える躍動の季節——「青春」とは、本当にそれだけで表現し得るものなのだろうか。

確かに若いというだけで、人はずいぶん幸福なものだ。しかしその甘さにひたるには、現実はいくらにも苦い。可能性としての豊かさを、正直に実現しようとすればするほど、青春を美しい言葉だけで飾ることは、何かうしろめたさ、そんなものさえ感じてしまう。理想と現実のギャップ、その中でうごめきながら時を刻んでゆく。それが、「我らが日々」なのだろうか。

最初に文夫と節子。——婚約という一つの点で結ばれながら、それが線になり面となり得なかった二人の生活には、何か青春がもつ「時」の重さ、そんなものさえ感じてしまう。例えば、青春という「時」を表現した二人の言葉を、つづけてみたい。

「ぼくらの青春——それはね、欲しいと思うものがいつも手に入るほど豊かだったろうか……。これはあってほしいものだ、あるべきものだと思うものが一方で心の中を、すっと逃げていってしまう。それがぼくらの青春だったのではないだろうか。」

文夫は、こう語り、彼の生活には、「生」に対する一種の開き直りの感さえ抱いてしまう。

これに対して節子は、必死になって「自身の生」を求め続ける。

「生きる喜びとは言はない、せめて生きたと言える日々を自分がまた持つことができないものか……。茫漠とした世界の中に確かな杭を打ち込むことによって、そこに歴史と呼ぶにたるものを生み出せないものでしょうか……。」

節子は理想を追い、文夫は現実の中に佇む人であった。そしてこの二人の相違こそ、青春という季節の底にからみあう複雑さに他ならない。

佐野も確かな足跡を残してゆく。党の崩壊、冷たい視線の中でぬぐい切れない自己不信。不安をごまかしながら、平凡な出世コースを惰性の中でたどるだけのけだるい日々。そんな時ふと目にした副社長の表情——社会人としてこれ以上望む物も無い様に思える地位、報酬も、自らの死の恐怖にはなすすべもなかった事実。「人は死に臨んで何を想うのか。」という言葉で、彼は何をうったえたかったのだろうか。

そしてI教授と和子。I教授には家庭があり和子には明るい将来があった。与えられた環境に順応すること、それも一つの生き方であり、そこには安定がある。しかし二人はそういう確かさを越えようとした。

最終的に佐野は自殺し、二人は男と女の醜い泥の中で他人となってしまった。客観的にみれば不幸である。しかしその恵まれなかった彼らが、節子の胸には、越えがたい「強さ」として刻まれた。なぜか。人間の存在は、相対的なものではなく絶対的なものだからである。文夫の言葉を借りることにする。「幸や不幸は問題ではない、人は生きたということに満足すべきなのだ。」

青春といっても、それは単なる時の表現ではなく、自分自身の歴史の中で初めて意味をなすものだと思う。だからこそ幸、不幸だけで割り切らない生き方——自分に対していかに自分が真摯であるかを求める生き方をしたいと思う。できるかどうかはわからない。しかしそれは佐野の問いに対する、私の精一杯の答でもある。

「二十歳の原点」

4 E 小川智史

「感動」という言葉が、この場合あてはまるかどうかはわからないが、著者の高野悦子風に言えば「自己の新たな変革」が起きたようである。一冊の本を読んでこれ程、狼狽したことは以前にはなかった。自分の知らない全く新しいものを見いだした。

「他人が何を考えているか知りたくはないか？ましてや、同世代の人間の考えていることを知りたくないか？」と自問しているうちに、この本を探し出し、また、他人の日記を見るという一種の野次馬根性もあって読み始めた。二十歳と言えば、そんなに年齢差はないが、時代、世代の差がそこにあった。学生運動、70年安保、ベトナム戦争……。今の我々がはるか幼い時に聞いたことのある言葉、その時代に彼女は生きていた。

彼女にはいやに親近感を覚える。彼女の下宿していたのが京都であるせいもあるだろう。この日記の中の地名はほとんど知っており、この目で見ただことさえあるのだから……。彼女には、ページをめくるごとに驚かされる。日記であるから、あまり飾らず直接的に文章が書かれているからであろうか？

「2、3日前、太宰を2、3ページ読んだ後でポットのコードを首に巻いて左右に引張ったりしましたが、別に死のうと思ったわけではなく、ノドを圧迫したときの感触を楽しんだだけでして、しめあげられたノドは息をするにもゼイゼイと音をたてまして、妙に動物的に感じました。」

この文を読んで何を感じるだろう。驚愕？ 狂気？ それとも、感動？ 何も感じない人が中にはいるかもしれない。私はまずこの文の客観性に驚き、その行為

に狂気を感じた。そして読み進むうちに「生」というものを発見した。果たして、今、自分が「生きている」ということを感じとっている人間が何人いるだろう。私はいないと思う。それは「生きている」のが当たり前だからである。文中には、中核、ML、社青同、民青、革マル、民学同などと、今の我々にはわからない言葉が書かれているが、彼女にもまた自己主張があるだろうが、要は「生」である。この日記に書かれていることは「生きる」ということである。彼女は、自分自身が生きているということを立証しなかったのだろう。

太宰治の本を読んでみた。この本に感化されたのかもしれない。それだけでもなかった。そこには数多くの苦悩が書かれてあった。苦悩は生きることか？ そのようである。死にたい程の苦悩、逆に言えば、それが取りも直さず生きていることなんだ。彼もまた自殺志願者(?)であった。また「生きる」ということをまじめに考えた人であろう。

私には「生きる」ということは、まだわからない。しかし、そのせいで狼狽し、錯乱し、感傷的になった。また、著者は特別な人間だと知りながら、一時代前の若者の考え方を垣間見た思いがした。



新 着 図 書 案 内



- | | | | |
|---------------------|--------|--------------------|-----------------|
| 朝日百科世界の植物 | 朝日新聞社 | ○公務員になるには | |
| ○種子植物1-9 | | ○裁判官・弁護士・検事になるには | |
| ○シダ植物・コケ類・菌類 | | ○工芸家になるには 1 | |
| ○植物の生態・形態 | | ○外交官になるには | |
| ○植物と人間文化 | | ○コンピュータ技術者になるには | |
| 趣味の家庭園芸 | 趣味と生活社 | ○整備士になるには | |
| ○草花1-3 | | 新家庭百科事典 | 講談社 |
| ○樹木1-2 | | ○料理 1-2 | |
| ○果樹・野菜 | | ○エチケット・美容・手紙 | |
| ○鉢物 | | ○家庭の医学 1-2 | |
| ○温室・室内植物 | | ○妊娠出産・育児 | |
| ○盆栽 | | ○和裁・洋裁 | |
| ○園芸百科・総索引 | | ○手芸・手工芸・編み物 | |
| なるにはBOOKS | ペリかん社 | ○住宅・インテリア | |
| ○パイロットになるには | | ○園芸・いけばな・茶の湯 | |
| ○スチュワーデスになるには | | ○レジャー・趣味 | |
| ○デザイナーになるには 1 | | ○暮らしの知恵・法律 | |
| ○探検家・登山家になるには | | ○暮らしの歳時記 | |
| ○美容師になるには | | 法隆寺を支えた木 | 西岡 常一他 NHK |
| ○アナウンサー・D. J. になるには | | 日々に証しを | 津田 信 光文社 |
| ○マンガ家・イラストレーターになるには | | 翳りある座席(上・下) | 黒岩 重吾 実業之日本社 |
| ○船長になるには | | 黒いレンズ | 黒岩 重吾 中央公論社 |
| ○映画監督・TVディレクターになるには | | 衝動殺人 | 佐藤 秀郎 " |
| ○通訳になるには | | 待秋日記 | 吉村正一郎 朝日新聞社 |
| ○デザイナーになるには 2 | | もう一度海へ行きたかった | 永井 忠 " |
| ○医師・薬剤師になるには | | お母さん ぼくが生まれてごめんなさい | |
| ○看護婦・保健婦になるには | | | 向野 幾生 サンケイ出版 |
| ○調理師・栄養士になるには | | 第三次世界大戦 | ハケット 二見書房 |
| ○俳優・歌手になるには | | マネー・メーカー | マクナマラ KKベストセラーズ |
| ○保母・社会福祉主事になるには | | ナイルに死す | クリスティ 早川書房 |
| ○新聞・放送記者になるには | | 終りなき戦い | ホールドマン " |
| ○エンジニアになるには 1 | | SF 猫 | ヤンガー サンケイ出版 |
| ○司書・学芸員になるには | | 歌う女・歌わない女 | ヴァルダ KKベストセラーズ |

「JOIS オンライン検索サービス」を始めました

あなたは、現在の研究テーマについての情報をどうやって探しておられますか。「自分で探すのは限界があるし、今の図書館では遅くて不十分であるし、その他の方法もよく解らない」ということはありませんでしたか。JOIS オンライン検索サービスは、そんな方々の手助けをするものです。あなたは、研究テーマのみをお持ちいただければ、後は図書館員が、端末機によって、JICSTのコンピュータと会話して、検索いたします。

「しかし、情報を自分で探すのも、研究の重要な要素である」という方もおられると思います。もちろん、

その通りです。探すのは、あくまでも御自身です。しかし、今まで探された情報で、重大な漏れがあったために、研究をやり直されたということはありませんか。JOISは、ほとんど全世界の情報を集めていますから、重大な漏れは起りません。その為に、不必要な研究の重複はさげられます。

また、JOISを利用する時間は、1回につき10～20分ですから、時間を節約できます。

とにかく、一度お試めし下さい。必ず御満足のいく結果が得られると思います。

現在利用できるデータファイルは、次のとおりです。

ファイル名	蓄積期間	情報量	分野	情報源	備考
JICST理工学 文献ファイル	1975年4月 ～ 現在	約36万件/年	理工学 全般	雑誌(8,500種) レポート 会議資料	JICST発行の「科学技術 文献速報」に対応
CASearch化学 文献ファイル	1976年1月 ～ 現在	約38万件/年	化学 化学工業	雑誌(14,000種) レポート 図書、学位論文 特許(27カ国)	米国ケミカル・アブストラ クツ・サービス発行の 「Chem. Abst」に対応
MEDLARS 医学文献ファイル	1974年1月 ～ 現在	約25万件/年	医学 薬学	雑誌(2,300種) モノグラフ	米国国立医学図書館発行 の「Index Medicus」に 対応
TOXLINE 毒性文献ファイル	1974年1月 ～ 現在	約12万件/年	毒物学と その関連 分野	雑誌(14,000種) 会議資料、学位論 文、政府刊行物、 特許(26カ国)	Chem. Abst., Index Me dicus, Biol. Abst., Int'l. Pharm. Abst., Pesticides Abst. など11種に対応
CLEARING 国内研究案内ファ イル	1976年度 ～ 現在	約1.5万件/年	理工学 全般	アンケート結果	国内の公共試験研究機関 約540機関で行なってい る研究テーマを対象。
SSIE 米国研究案内ファ イル	1978年度の み	約10.5万件	理工学 社会科学	各機関よりSSIE に任意に提出	米国内約1,300機関で進 行中、計画中の研究テーマ

JOISの利用を希望される方は、図書室へ来て下さって、図書館員にお申し出下さい。その際、端末機は図書館員が操作しますが、あなたは、必ず隣りにして下さい。研究テーマについて精通されているのは、あなたですから。

料金は、現在JOISの使用料金のみを研究費の振替えによって払っていただきます。私費による取扱いは行っていません。使用料金は、次のとおりです。

＜ファイル利用料＞

- JICST・MEDLARS・CLEARING・SSIE 180円/分
- CAS 297円/分
- TOXLINE 250円/分

＜オフライン回答料＞

- 手配料 500円/回
- 回答書料 JICST・MEDLARS等 15円/件
- CAS 39円/件
- TOXLINE 22円/件